

昨年6月、歯科外来西口近くの路上に倒れていた医科通院中の心肺停止の患者様を本学歯学科の学生5人が発見し、現場近くに居合わせた本院の看護師に知らせるとともに看護師の指示に従い緊急連絡及び歯学部を設置してあるAED（自動体外式除細動器）を使用し救命処置を行い、患者様を救命することができました。彼らはその活躍をたたえられ、7月11日に新潟大学歯学部より表彰されました。今回、彼らからこの突然の出来事に遭遇した率直な感想をインタビュー形式で寄稿していただきました。実際に患者様の生死に関わる状況に直面し、動揺しながらも看護師と協力して救命しようとした熱意が伝わってきます。また、歯学部で一般医学や口腔外科学、歯科麻酔学を学んできた彼らでしたが、救命救急に対する自分たちの知識やトレーニングが不足していることも痛感したようです。



はじめてのAED～救命救急に携わって～

歯学科6年 又吉裕子・高橋圭子

歯学科5年 今井秀明・石坂淳子・池田 峻

今回、あの現場を皆さんにより身近に感じていただこうと、このようなインタビュー形式で表現させていただきました。自分たちが感じたことがうまく伝われば幸いです。

（池：池田、石：石坂、今：今井）

—事件に気づいた時はどんな状況でしたか？

池：あの時は本当びっくりしました。外に人が倒れていて。

今：「心停止っ!!」って聞こえた瞬間、あたふたしました。あの時そういえば池田君がAEDっていったんです。

池：麻酔の講義で勉強したのを思い出したんです。

—よくAEDのある場所がわかりましたね。

今：病院内のわかりやすいところに設置されているので知っていたんです。そういえば池田君、AEDの使い方知ってたの？

池：よくはわからなかったけど、テレビで一般の人にも使えるようなこと聞いていて持ってき

たんです。

—AEDって知っていましたか？

石：たしか、愛・地球博でこの装置が活躍したって聞きました。

今：でも、使い方はそんなに難しくはありませんでした。機械が全部指示してくれたから。

池：一般の人でも簡単に使えるということがよく分かりました。あとは冷静でいられるかだと思います。

—どうやってみんなで連携を取ったのですか？

今：はじめてこういう状況に遭遇すると、何をしたらいいか判断できませんね。

石：そういう点では、看護師さんがいてくれて本当に助かりました。まわりにいた人たちに的確な指示をしてくれました。意識の確認、声かけ、気道確保に人工呼吸……。

今：迅速な対応が大事なんだそうです。

池：救命救急って一刻一秒を争うって講義で勉強しました。

今：そういう意味で、自分たちは力になれたのか

なと思います。

—今回の件で感想や反省がありますか？

石：今回のことで自分たちでもできることがあるものだと思います。

今：患者さんを助けたい一心で、不安だったけど、必死になっていました。でも一人ではきっと何もできなかつたろうと思います。

池：自然とチームができて、看護師さんを長にして連携がとれていました。

石：自分が出る役割を、それぞれが実行していた気がします。

今：でも、もっとスムーズにできたらよかったのにと反省しています。

石：日頃からこういうことが起こるかもしれないと思って訓練しておくことも必要だと感じました。

今：あの後に救急救命の実習をやったけど、もっと早い時期に実習をやっていたら良かったと思います。

池：あの実習を受けなければいざという時、率先して動けると思います。

石：歯科治療中に何か起きた時にも、すぐに行動できることが大事だと思います。今後も勉強していきたいと思います。

—ありがとうございました。



この出来事の後、歯科外来における救急体制に対して改善が行われ、歯科の患者様や学生、教職員の急変時には口腔外科、歯科麻酔科の歯科医がすぐに各部署より駆けつけられる歯学部全館放送のシステムの整備がなされました。以前よりあった心肺停止のような一刻を争うようなときに、医科の外来・病棟から医師が駆けつける医科全館放送のシステムも、歯科も含めた全館放送ができるように改善されました。また、AEDを使用した救命救急の講習も教員、看護師だけでなく歯科研修医、歯学部学生にも行われるようになっていきます。今回の学生の活躍により、歯学部における救命医療の重要性に目が向けられるようになりました。今回の学生の活躍をたたえるだけでなく、本学の学生や卒業生、教職員が患者様や一般市民の救命医療の一助を担えるように、研鑽を怠らないことが必要と感じられました。

(前書き、後書き文責：編集委員 福田純一)



テニス部の活躍

歯学科3年 河村 篤志

今回歯学部ニュースの方で部活動を取り上げて頂けるということで、この場をお借りしてテニス部の紹介をしたいと思います。本来ならば、テニス部の紹介は自分よりも経験豊かな先輩の方が適任だとは思いますが、現在主将を務めさせて頂いているので、先輩方に代わって書きたいと思います。

突然ですが、みなさんは「歯学部テニス部」と聞くとどのようなイメージをお持ちでしょうか？

自分がテニス部に入ってから早3年が経ちますが、同級生などからはテニス部について、「練習って週7回やってるんでしょ？」や「すごく厳しくて休む暇もないんでしょ？」などネガティブなイメージしか聞かれたことがありません。けれども、これらの質問のほとんどが（中には的を射ているものもありますが）間違ったイメージと言ってよいでしょう。現在テニス部は毎週水曜日と土曜日に週2回のペースでやっており、内容もハードなものはほとんどなく、男女合同でテニスを楽しみながら練習を行っています。けれども、もちろん「ただ楽しめればいい」という考えではなく、全員が向上心を持ち、強くなるよう励んでいる“熱い”部活であることも自負しています。このような向上心とやる気があるからこそ、暇さえあればテニスをしてしまう部員が生まれ、そのため時には上のような勘違いが生まれてしまうのだと思います。この様なテニスに対するよい雰囲気は代々先輩方から受け継がれてきたもので、この雰囲気を守り、また後輩に受け継いでいきたいと思っています。

さて、テニス部だけではなく他の部活にとっても、1年の中の最大のイベントといえばデンタルだと思います。このデンタルに向けて様々な部活が汗を流していると思いますが、テニス部のデン

タルは新学期を迎えた春から始まります。というのも、デンタルに向けてのランク戦が春から行われるからです。テニス部のデンタルには、男子はダブルス2組シングルス3人の計7人、女子はダブルス1組シングルス2人の計5人が出ることが出来ますが、基本的にはレギュラーは固定性で、数少ない椅子を争わなければなりません。勝ち進み、晴れてレギュラーになれる人もいますが、その一方で負けて涙を呑む人もいます。かくいう自分も悔しい思いをした一人です。そしてレギュラーが決まると、後はデンタルに向けての練習の日々が始まります。この時期には学業に支障が出ないようにしながら週5回で練習が（もちろん自主的に）行われます。今回のデンタルで、女子3連覇を達成しましたが、指導者がいるわけでもなく、部員も経験者の方が少ないというわがテニス部がこの様な素晴らしい成績を収めることができたのはよい雰囲気と練習量の結果だと思っています。

デンタルが終わり、それまで第一線で部活を引っ張って頂いた先輩方が引退してしまい、現在の部活は少し寂しくなっていました。先輩方には忙しい合間を縫って練習に参加して頂いていますが、今は主に1~4年生の17人で部活を行っています。人数も以前に比べ少人数になってしまい、戦力的にも大きく下がってしまいましたが、天井がないほうが空も見やすくなります。試合に出られる機会が多くなり、より経験を積むこともできます。いずれ先輩方がいた頃よりもよいチームを作りたいと密かに思っています。けれども、まずは自分が先輩よりも強くならなければ話が進まないの、野望が叶うのはだいぶ先のことだとは思いますが。部長としての日々は思っていたよりも大変です。練習場所の確保からメニューの作

成、他校との連絡などまだまだ以前の部長には遠く及ばず、落ち込んでしまうことも多々あります。まだまだ頼りなく「黙ってついて来い」とは言えませんが、折角部を任せて頂けたのでこのプレッシャーもむしろ楽しみながら精一杯やっていきたいと思っています。

最後になりましたが、いつも陰ながら自分たち

テニス部を支えて頂いている大学の方々、OB・OGの先生方、また先輩方にこの場を借りて感謝を述べたいと思います。そのような応援の聲に恥じぬよう、新潟大学の誇りを胸に少しでもよい結果を求め、最強の挑戦者として白球ではなくテニスボールを全力で追いかけていきたいと思いません。



平成19年8月4日 デンタル開催地軽井沢にて閉会式後



平成19年8月3日 デンタル女子4回戦 対愛知学院大学戦
ダブルス1で奮闘する山田めぐみ（左）と高橋圭子（右）

男子バレーボール部の活躍

歯学科5年 小川 信

大学に入学して、僕がまず最初にやりたかったのがもう一つの大学生活でもあるサークル活動でした。高校の時にバレーボールを部活としてやっていた僕は、色々なバレーのサークルを見学しました。もちろんバレー以外のサークルも見学しましたが、結局僕はすぐに「新潟大学歯学部バレーボール部」に入部しました。

よくあるサークルのように、“特に厳しい練習もなく、参加も自由で、男女一緒に楽しく試合をやる”みたいな自由な感じもいかにも大学生らしくて楽しそうに思いました。しかし、僕が心の底から欲していたのはそういうものではありませんでした。

仲間が必死になってつなげてくれたボールを相手コートに叩きつけて得点にしたとき、自分がなんとかつなげたボールを仲間が得点にしてくれたとき、その時の感動はなによりも素晴らしいものなのです。それが、緊張感あふれる大きな大会、その大事なゲームの大事な場面ならばなおさらです。さらにバレーボールは点が入る度にみんなで集まって派手にガッツポーズや、ハイタッチをします。そんな瞬間があるから、仲間が、チームが大好きになるのです。そんな瞬間がこの部活にはありました。

しかし、いつも楽しいことばかりではありません。この部活は新潟大学歯学部の部活のなかで、おそらく最も厳しい練習をしていると思います。また人数も少ないため、一人一人がやらなければいけない仕事が多くて大変です。当然のことですが、僕らは勉学が本業であるし、またほぼ全員がアルバイトをしているので、とても忙しい日々を送っています。同じクラスの仲間がテストが近いために部活を休んでいても、僕らは休むことができません。一人が休むことはチームのみんなに大きな迷惑をかけることになるからです。休日にやりたいことがあっても、練習試合や大会などがあるからあきらめなければいけないことも多いで

す。厳しい練習のために体がだるくて、朝学校に行くのがとても辛いこともしばしばです。「大学生なのになんでこんな自由のない、ギリギリの生活をしているんだろう」と退部を本気で考えたことは何度もあります。

近年、新潟大学歯学部の男子の団体競技は全くといっていいほど結果を残せていません。なぜなら各学年に男子が20人ほどしかいないからです。他の国立大学は2倍ほど、私立の大学などはその3～4倍の人数がいて、さらに私立の大学などはどの競技においても国体選手、高校の県選抜選手などがあるので、当たり前の結果だと思います。そんな厳しい状況下において我が男子バレー部は一昨年デンタル（全日本歯科学学生体育大会）で準優勝、去年3位でした。これは本当に素晴らしい快挙だと自分でも思います（笑）。

今年（2007年）、男子バレー部は新入生が入らず、6人ちょうどになってしまいました。近年リベロというポジションが追加され、どのチームも7人で試合をするので、6人で試合をするのは非常に不利となります。その6人にマネージャー、コーチ（他大学の友人）、助っ人1年生を含めた9人という出場校のなかで最も少ないメンバーで今年のデンタルに臨みました。

今年のデンタルは正直、新潟大学の強さは圧倒的でした。新潟大学は優勝候補の一つとしてマークされていて、色々な大学が僕達の試合の観戦やビデオ撮影を行い、研究をしていましたが、「そんなの関係ねえ」という感じで、大差をつけて勝ち進んでいきました。

予選の最後に今年から国体選手のエースを加入した優勝候補の東京歯科大学と対戦しました。事実上の決勝戦という感じで、予選であるにもかかわらず大勢のギャラリーと何台ものビデオカメラに囲まれて、その試合は行われました。

予想通り接戦となり、かなり白熱した試合になりました。途中相手が優勢な状態になりましたが、

僕達は全く負けることを考えませんでした。それはおそらく今までたくさんの練習試合、大会を経験してきたことからの自信によるものだったのでしょう。結局その試合はギリギリのところまで逆転勝ちをおさめ、新潟大学は全勝で決勝トーナメントにコマをすすめました。

決勝トーナメントは準々決勝、準決勝と順調に勝ち進みましたが、決勝では予選で対戦した東京歯科大学にあたり、今度はあっさり負けてしまいました。結局今年のデンタルは準優勝ということで、残念ながらまたしても優勝には手が届きませんでした。

試合が終わったあと、他の大学の選手達が、「普段どういう練習をしてるんですか?」「自分達もこれから新潟大学のようなチームをつくりたいです。」と言ってくれました。うちのチームにはスタースタプレイヤーはいません。平均身長も低く、大学からバレーをはじめたメンバーもいました。また、他のチームのように自分達を常に指導してくれる現場監督が存在するわけでもありません。

みんなで一つ一つのプレーについて、その練習

について常に考えること。ビデオや実際の試合を何度も見ながら、他のチームの研究、対策をみんなでも真剣に考えること。そしてなによりも多くの練習を積むこと。それが僕達のやってきたことでした。

今現在、男子バレー部は4人しかいません。来年デンタルに出場できるかどうかもう危うい状態ですが、有力な新人が入ってきて、来年のデンタルこそ悲願の優勝を遂げると信じています。

最後に、僕達を支えてくださった麻醉科の染谷先生、塚田先生、口腔外科の飯田先生、五島先生、池田先生、庭野先生、安島先生、歯周科の島田先生、前川先生、小児歯科の渡辺先生、佐野先生、予防歯科の近藤先生、金子先生、矯正科の小栗先生、丹原先生、義歯科の木下先生、その他各方面で活躍していらっしゃるOB、OGの先生方に心から感謝して、筆を置きたいと思います。先生方のおかげで僕達はとても楽しく、素晴らしい時を過ごすことができました。本当にありがとうございました。



平成19年8月 デンタル表彰式後 長野県大町市にて

求 柔道部員!!

歯学科5年 峯村 周

第39回全国歯科学生体育大会柔道部門・個人戦男子73kg以下級において優勝致しましたことをご報告させていただきます。

歯学部柔道部は今年春に私が結成し、医学部柔道部と合同で練習してきました。この場をお借りして、医学部柔道部顧問の出羽准教授（法医学）と医学部柔道部の仲間達、そして快く歯学部柔道部の顧問になって下さった八巻先生（兼ラグビー部顧問）と私の我儘を聞いてくれた歯学部ラグビー部の仲間達に心より御礼申し上げます。

今回は柔道の話がメインになりますが、私は歯学部ラグビー部の主将でもあります。伝統ある歯学部ラグビー部を差し置いて、今年出来たばかりの柔道部の件で私がこのような文章を書くことは非常に心苦しいことです。先日（現在執筆日時12月26日）行われた第40回全国歯科学生体育大会ラグビー・フットボール部門では、1回戦に九州大学と対戦し19対10で敗北してしまいました。今後はラグビー部の活動でも皆様にご報告できるよう頑張りたいと思います。

さて、デンタルでの試合の様態を報告することより、皆様に柔道のことをもっと知って頂きたいと思い、今回は柔道に関する宣伝をさせて頂きたいと思います。

私は長野県の出身です。長野市松代町というところで3歳から高校卒業までを過ごしました。松代町は真田家十万石の城下町です。初代松代藩主は、大阪夏の陣で討死した真田幸村（歴史好きにはファンも多いことでしょう）の兄、真田信之です。最近人気のNHKの大河ドラマ「風林火山」の舞台となった川中島の合戦は、町の北を流れる千曲川の対岸で行われました。私の卒業した清野小学校の裏にある妻女山は、上杉謙信が合戦時に陣を張った場所で、更に私の卒業した松代中学の隣には、武田信玄の出城であった海津城跡が在ります。松代町出身の有名人は他にも、幕末の大思想家「佐久間象山」や、最近話題になった映画「硫

黄島からの手紙」で有名になった硫黄島の総指揮官「栗林忠道」中将がおられます。それから太平洋戦争末期に、東京大空襲で東京が壊滅的な被害に遭った直後から、大本営と皇居を移転する計画が具体的になり、全国的な調査の結果、松代町の南にある象山・舞鶴山・皆神山の三つの山に総全長10キロメートルにも及ぶ巨大な地下壕を建設することになりました。建設作業には朝鮮半島から徴用された朝鮮人が中心となり、最盛期には朝鮮人と日本人合わせて1万人が働いていたとされています。作業は1944年11月11日から1945年8月15日の終戦まで続けられ、予定の75%まで終了していたとのこと。現在は象山の地下壕約500メートル余りが一般に公開されています。実家からすぐ近くなので小さい頃は毎日のように遊びに行っていました。不謹慎ですが、地下壕の中は夏涼しく冬暖かい、最高の遊び場でありました。少し地元の紹介が長くなりましたが、こうした歴史深く自然豊かな松代に育ち、文武両道とはいかないにしても力強く育ったということは間違いのないでしょう。

ちょうど私が生まれる前ぐらいに父親の高校時代の柔道部の先輩が、町に柔道の道場を開きました。松代藩の武道教育が行われた「文武学校」（現在も当時の建物が残り、公開されています）に因んで「文武館」という名前の柔道教室を開催したのであります。父親が師範をする道場で3歳から柔道を始めました。当然私には始めた頃の記憶は有りませんから、気づいたらもうやっていたという感じです。小学生を中心に20人弱がやっていたと思いますが、当時は通ってくる子供も松代町内の小学校の子供ばかりでした。なかなか市の大会でも優勝することは難しかったのですが、私の一つ上の代あたりから粒が揃い始め、今では人数も40人を超え地区大会では負け無しの道場となりました。私が小学生の頃は、町の小学生が集まって道場で柔道を習って、そのまま皆が同じ中学に入

学していきましたが、私が中学生の時ですら中学の柔道部は存在したものの柔道専門の指導者がおらず、中学の柔道部は弱小でした。折角町に小学生が柔道を習う機会があるのに、中学でそういった機会が得られないのは残念なことです。町の子供を鍛える道場は、地元の中学校や高校の部活動の基盤ともなり、小学校以外での人間関係構築や精神教育・礼儀作法の教育に大きく貢献できるものです。今では中学にも柔道専門の先生が来て下さり、全国大会にも出場するほどの強豪校となりました。こうして小学生で柔道を習いに来る子供が増え、皆で切磋琢磨することに中学や高校でも活躍する選手が現れ、色々な方面で交流を深めて人間関係を築き上げ、また道場に還元してくれるようになりました。

私の中学の先輩は、本人も高校の時はインターハイでベスト 8 に入る程の選手であり、帝京大学在学中には谷亮子（旧姓田村）選手の付き人として役割を果たして、今は子育ての合間をぬって週に一度ぐらいは指導に駆けつけてくれます。また、私の中学の時の一つ下の後輩は日体大在学時に、バルセロナオリンピックの71kg級金メダリスト・古賀稔彦氏の開催する道場で子供たちに柔道を教え、我々の道場と古賀先生の間を築き上げてくれました。その関係もあって、今年4月には我々の道場に古賀先生をお招きして大会を開催しました。最近はあまり日本柔道の国際大会での成績が芳しくないためか、なかなか皆さんご存じないかと思いますが、アトランタ五輪金メダリストの恵本裕子や、アテネ五輪金メダリストの上野雅恵、アテネ五輪銀メダリストの横澤由貴が所属する三井住友海上の女子柔道部の監督をされている柳沢久監督は我々の高校のOBです。ソウル五輪では女子の監督として赴き、現在でも国際大会にはコーチ陣の中心的役割をされている方ですが、不定期に長野へ選手を伴って来られることがあって、その度に我々の道場へ訪問して下さり、高校生は練習相手として世界トップレベルの技を体験できます。

兎に角、二十数年前に始めた町の小さな道場がこうして徐々に規模が大きくなり、多くの門下生

を排出し、こうして歴史ある町に再び活気を齎してくれています。しかしながらそれとは対照的に、ここ何年か歯学部の入学生定員が減ったせいもあるのでしょうか、なかなか柔道やラグビーの経験者がおりません。また未経験者でもこうした格闘系のスポーツをやりたがる人が少なくなったような気がします。スポーツはどれも厳しいものですが、特に格闘系のスポーツにおいては怪我也多く練習もハードです。肉体的にも逞しさが要求されます。ですがこうした日々の研鑽が必ず勉学の際の集中力に繋がります（私は冗談ではなく本当に繋がらなくて困っていますが）。これから歯科医師は社会的に厳しい状況に置かれていきます。こうした中で頼りになるのは縦の関係や歯科医師という枠組みを超えての横の繋がりと信じています。縦の関係を通じて歯科医師としての関係を築き、横の関係を通して様々な業種の人々と知り合い、一人の社会人として自立する糧とする、こうした人間関係の基本的な構図を描くためにはまず動かなければなりません。そうです、運動を一所懸命にやるということです。何か一つ馬鹿になってやることです。人それぞれ熱中することはあるかと思いますが、私はもっともっと多くの人に柔道をここ新潟大学歯学部で経験していただきたいと思えます。その暁には私の柔道関係の全てを以って全国の歯学部柔道部では最高の環境を提供できると確信しております。



高校時代、いつも県大会個人戦決勝で戦っていた相手の角田卓也氏（写真右）。

ただの一度として私が勝った例が無い。高校時代は2年連続のインターハイ出場を果たしています。現在は刑務官として働いています。この日のためにわざわざ駆けつけてくれました。心からの親友です。

予想外の優勝

歯学科5年 大 墨 竜 也

昨年の夏、卓球部主将として迎えるデンタルに、まさか部門実行委員長として参加することになるうとは。記憶は定かではありませんが、私自身知ったのは4年になったころではなかったかと思いません。その頃はまだ実感もなく、新潟じゃデンタルついでの観光もなくつまらないなあなんて楽観的なものでした。

しかし、その年のデンタルは今までとは心持の違うものとなりました。いよいよこれは大変なことになると。レセプションでは部門主管である東京歯科大学をはじめ、参加校の代表者に挨拶にまわり、お酒の注ぎつ注がれつの攻防を凌ぎ、なんとか連絡先を交換。来年への下地作りに奮闘でした。この後から大会まで、ここでは語り尽くせない、部員全員での大会運営準備の仕事の山との格闘がはじまりました。

全くゼロからのスタートで、過去の大会資料の確認から始まりました。ちょうど5年前私が入部する前年、新潟が部門主管を務めたときの実行委員長であった先輩が学内にいらっしゃったことも救いでした。会場の体育館確保、予算案作り、パンフレット作り、各大学との連絡等の前準備を部員で分担しながら進め、なんとか当日を迎えることが出来ましたが、中でも大変だったのは、各大学との連絡でした。参加要綱などの返事がなかなか返ってこず、こちらの作業を進めることができないという状況もありました。これを読んでくださる部活の代表者の方、他大学からの連絡の返事は早めに出してあげてください。なんの応答もないことは、相手に伝わっているかどうかもわからず、不安感を与え、信頼関係を損なうことにも繋がりがねないということを、私自身学ぶよい機会となりました。

しかし、この当日の大会運営にこそ難点がありました。運営するこちら側もちろん選手として大会に出場するわけで、部員のほとんどが同時に試合に出て行かなければならないという状況が想

定されるため、本部に常にいることができ、アナウンスなどもやってもらえるメンバーが必要でした。

そこで、全学、医学部の卓球部員に協力を求めスタッフの確保を行いました。それによりこちらが試合にも集中することができ、以下で記すような結果にこれが功を奏したことは言うまでもありません。

近年、我が卓球部は男子の数が少なく、結果のほうも女子に押され気味でありました。実際、私の下には男子が2年入らず、4年になって初めて男子後輩が入ってくれ、彼がまた中高経験というツワモノで一気にレベルアップしました。これにより私のデンタルでの荷物持ちから昇格となりました。もともと歯学部卓球部は初心者が多く、選手は大学から始めて部員同士、切磋琢磨しながら技術を磨いていき、そういった中でも結果が出せるという醍醐味があります。この記事はホームページからも閲覧可能ということで、これからの新入生向けにも部員勧誘の一環として宣伝させていただこうと思います。詳細は歯学部HP部活紹介もご覧ください。

ただ、今回のデンタルでは女子の活躍は特筆すべきことだったと思います。顧問福島先生が理事会でご尽力もあり、今大会第39回から歯学科だけでなく、衛生士、技工士の学生にも出場の機会が広がったのです。新潟は特に口腔生命福祉学科に女子の卓球経験者が2人おり、この影響は大きく、結果、女子団体優勝、個人ダブルス優勝と2冠達成となりました。男子は決勝トーナメントで団体優勝となった長崎と大接戦を繰り広げた末に、最後主将の私が試合を決定付ける負けを喫してしまい、大変悔しい思いもしましたが、結果、奇跡的に長崎大学とポイントが並び、2校総合優勝となりました。長崎大学とは試合後に一緒に飲んだり交流も深められ、新潟から遠く離れた仲間もでき、これがデンタルの楽しみではないでしょうか。

今大会での14年ぶりの総合優勝は選手をはじめ、先生方も全く予想せぬ結果でありました。私自身、運営に気が取られ、3日目の大会最終日になり、獲得ポイント数を途中集計してみてもわかったというようなもので、振り返ってみれば、そのときは様々なトラブルが起き、それに対処することに悪戦苦闘で、無事に運営できてよかったと実感できたのはしばらく日が経ってからでした。

新潟としては主管を務め、さらに優勝も勝ち取ることができたこの結果は、OB・OGの先生方のご声援、大会運営の補助をしてくれた学生の協力があってこそであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

5年後のデンタルは総合主管として新潟で開催されると聞いております。その際には、デンタル運営の経験者として運営側のお役に立てればなあ

と考えています。やはり地元開催というのは忙しくもありますが、コンディション作りにはメリットです。国体は開催地の都道府県が歴代優勝しているそうです。新潟での開催となれば、OB・OGの先生方も応援に来られる機会が多くなると思いますので、こういったことがプラスにはたらくのではないのでしょうか。

現在、卓球部の悩みとしては、新入部員を1人でも多く入れたいということに尽きます。せっかく今回結果を残すことができたにも関わらず、特に男子の部員不足で最低4人でチームを構成する団体戦に出られないという事態になりかねないという状況で、いつでも部員募集中です。男子、女子問わず少しでも卓球に興味のある方、経験のない方でも全くかまいませんので卓球を始めてみてはいかがでしょうか？



数々のトロフィー・賞状を勝ち取った卓球部一同



追記

平成19年度の学友会表彰として、学生個人表彰部門からは口腔生命福祉学科の平林友香さん（歯学部卓球部）、学生団体表彰として歯学部卓球部、歯学部女子硬式庭球部が選出されました。全学を通して個人表彰は3名、団体表彰（体育会系）は6団体であったことから、歯学部体育会系の活躍がいかによろしかったかがうかがえます。今後の活躍にも期待したいと思います。

（文責：編集委員 井上 誠）